

イングリッシュ・カフェ 実践報告－ 4年間の軌跡とその成長についての考察

宇 塚 万里子

How the English Café Has Evolved Over Four Years

Mariko UZUKA

要旨

岡山大学言語教育センターでは、英語コミュニケーションを実践する場を設けることにより、1. 学生の英語学習意欲の向上や自律学習の促進につなげる、2. 留学生との交流を通して異文化理解力を培う、などを目的として、平成21年5月にイングリッシュ・カフェを開設した。そして、それは4年後には当初の約8倍以上の広さを持つL-café（ソーシャル・ラーニング・スペース/語学カフェ）へと発展。本稿では、活動データと学生アンケートを基に4年間の軌跡をたどり、スタートしたばかりの初期、使用言語や学生スタッフ採用が始まった第二期、学生が積極的にカフェ運営に参加するようになった第三期に分類した。その結果、ソーシャル・ラーニングの実践とスチューデント・ティーチャーをはじめとする学生の積極性がカフェの発展の大きな要因の一つであることが考えられる。

キーワード：自律学習、ソーシャル・ラーニング、スチューデント・ティーチャー、ピア・アドバイジング、

1. はじめに

岡山大学言語教育センターでは、1. 授業以外でも気軽に参加できる英会話の場を共有することによって、学生の英語力向上と自発的な態度を啓発する、2. 留学キャリアの開発、異文化体験など学生同士で共有する機会を設けることにより、より多くの学生に英語のスキルアップや国際交流への関心を持たせる、の二つを目的に平成21年5月に、イングリッシュ・カフェ（EC）を大学構内の便利の良い場所（大学会館）に開設した。それまで、授業以外で英語を使う機会が少なかった岡山大学生の多くにとっては「授業や教科書という枠組みなしで、自由に留学生と英語で話す」ことは、新鮮であった反面、相当勇気のいる行為であって、英語力に自信のある学生か、或いは、留学や海外に強い関心のある学生でなければ、多少の興味はあってもECに実際に足を踏み入れることは、困難であったであろう。一方、日本語や日本文化を学びに来ている留学生にとっては、留学先の岡山大学で「英語でコミュニケーション」を目的の一つとして掲げているECはあまり興味のわかないものだったかもしれない。

しかし、ECは開設以来、予想を超えた多くの学生が訪れ、順調にその利用学生数を伸ばしてきた。また、毎年行っている学生アンケートからも高い満足度を得て、平成25年3月のL-café（ソーシャル・ラーニング・スペース*注1/語学カフェ）への移転・拡張につながったといえる。本稿では、平成21年度から4年間に渡る活動データと学生アンケートを基に、その軌跡をたどると

共に、その成長の要因について考察した。

2. イングリッシュ・カフェができるまで

ECを開設するに先立って、岡山大学では言語教育センターを中心に、国際センター、キャリア支援センター（注2）がワーキンググループを作り、その目的、活動内容、スケジュールなどについて検討された。このように、言語教育センター以外のセンターがEC開設前から協力体制を組んでいたことは、岡山大学ECの特徴の一つであり、カフェの日々の運営、イベント開催、広報など多方面に渡り、その発展を支えてきた。

グローバル人材育成が大学教育の一つの柱として明確に打ち出されつつある今日では、学生に授業外に英語を使う機会を提供することの意義も認められ、その試みは英語教育の一環として多くの大学で積極的に取り組まれているが、4年前は、特に国立大学においては、まだ新しい試みであり、他部署との協力体制がひかれていたものの、ECが実際どのように運営されるか、学生にどれくらい受け入れられるかなど未知な部分があったことは否めない。

3. ECの活動内容

ECの主な活動内容については、開設以来あまり変化がないが、以下の4つが主なものである。

- ・英会話やTOEFL対策など、少人数制レッスン（60分×10週）
 - ・留学生とのフリートーク
 - ・言語教育センター教員によるオフィス・アワーや英語学習ワークショップ
 - ・国際交流イベント

この他、CNNやBSなどの外国語放送、英語書籍、英語学習用書籍、DVD、英語新聞、雑誌などを視聴・閲覧ができ、無線LAN環境を整え、カフェ内で学生が自由に利用できるノートパソコンも備えている。同時に、飲食を許可し、授業の間の空いている時間やお昼休みに学生が自由に立ち寄り、会話や自習、グループ学習、休憩することを歓迎している。

4. 4年間の活動データ

4-1 利用学生数

利用学生数について、開設前は一日あたり20名程度と予想していたが、最初の学期にすでに平均31名の学生がECを利用した。さらに、その後も順調に利用者数は増え（図1参照）、4年後には約2倍となっている。また、最初の年を除くと、前期の方が後期より利用学生が多い傾向にある。その理由として第一に挙げられることは、年度初めの前期には、入学したばかりの新一年生

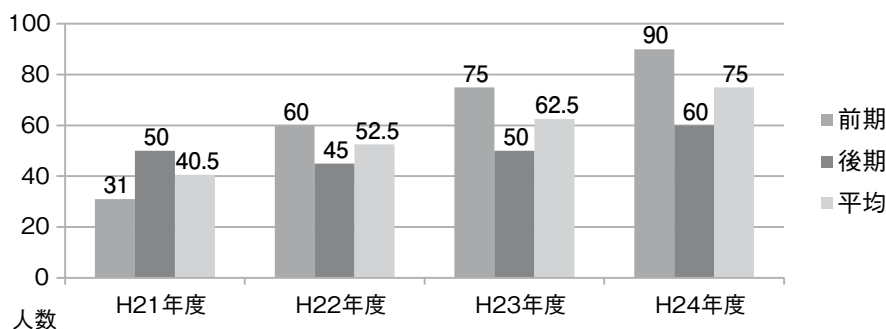


図1 一日あたりの利用学生数の変遷

が多くECに集まるが、後期になるとそれぞれ大学生活にも慣れ、EC以外の場所や活動（学部、サークル、アルバイトなど）に行動範囲を広げていき、忙しくなるにつれてECを利用する時間が減ってくるという事情がある。また、医・歯学部生においては、2年次後期から専門科目が鹿田キャンパス（注3）に移るので、ECに物理的に来にくくなることも考えられる。2番目の理由としては、交換留学生数の変動が揚げられる。交換留学生は、後期に来て翌年の夏帰国する学生が多いが、4月に来て1学期のみ滞在して帰国する学生もいる。したがって、前期には前年度の後期から留学に来ている学生と新たにきた学生の2グループが存在するため、留学生数もまた前期の方が多くなる傾向にある。

なお、利用学生のうち、留学生と日本人学生の利用者数の内訳は図2の通りである。年を追うごとに日本人学生が増加しているが、これはECの存在が大学内で周知されてきたことに加えて、ECのレッスンの受講を希望する学生が増えていることが要因となっている。（4-2レッスンについて、を参照）また平成23年度の留学生数が減っているのは、東日本大震災の影響で交換留学生数全体が減少したことがあげられる。（図2）

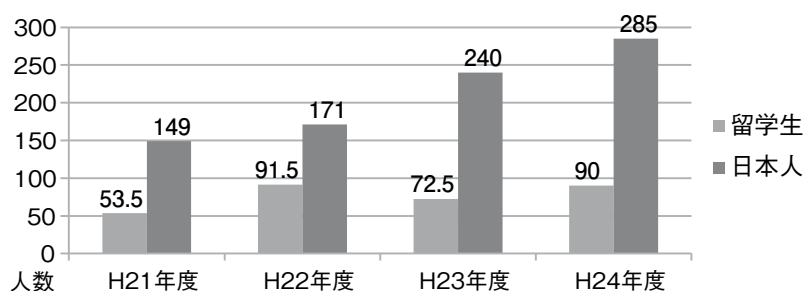


図2 一週間あたりの留学生と日本人学生数の変遷

以上、年間利用学生数を見ると、初年度の4,050人から4年後の平成24年には約2倍の7,500人もの学生が利用する施設へと成長した。（注5）これは、予想以上にECが学生達に受け入れられたといえると同時に、学生の要望に応える形でスペースを拡張してきたことも妥当であったといえる。逆に、言語教育センターおよび大学から理解とサポートを得て、施設の改善・整備を進めてきたことで、更なる利用学生数の伸びにつながったと考えられる。（図3参照）



図3 ECスペース拡張の変遷

4-2 ECレッスンについて

ECでは、学生に受けたいレッスンの種類と希望時間などを記入した申込み用紙を提出してもらい、その申込み数が一定を超えた場合にレッスンを開講している。英会話、TOEFL対策は一回60分で10週間を1コマとし、登録制となっている。また、オープンレッスンは、それぞれ発音、作文、スピーキングなどのフォーカスは決まっているが、その回だけの参加が可能であるため、たまたまその時間にカフェにいたので、ついでにレッスンを受けていくということもできる自由なスタイルである。それでも、どこかのタイミングでレッスンに参加して以来、登録はしていないが、毎週オープンレッスンに通ってくる学生も多い。さらに、ECの中でいきなり留学生と会話するのは抵抗がある学生も、留学生が担当するオープンレッスンに参加することで、他の学生や留学生と親しくなり、レッスン以外の時にもECに滞在して会話するようになることも珍しくない。特に学生が忙しくなる後期には、登録制に対してオープンレッスンの参加者が増える傾向にある。

また、前述（4-1）のように、ECの利用者が増えた一因にはレッスン受講者が増加していることが挙げられる（図4参照）。それは、開設から4年たつて学内でのECレッスンの認知度が上がってきたこともあるが、レッスンに対する満足度が常に高いことも大きな要因の一つだといえる。

高い満足度を支えている要因の一つにスチューデント・ティーチャー（ST）の活躍がある。ECでは、開設2年目の平成22年5月からST制を導入している。STは、教えたいという熱意があり、留学経験のあるTOEIC900点相当の英語力の先輩学生、或いは、英語を教えることに熱意のある留学生が務めている。

学生評価アンケートでのレッスン全体に対する満足度は4年間で大きな相違はなく、5段階スケールのうち、平均4.50（最高4.58、最低4.40）と例年非常に高く、学生達からもST制度が支持されていることがわかる。この他、「自由度が高い」「やる気のある学生が集まっている」「オープンなスペースで行われている」など全般的にポジティブな声が多い。その一方で、「もっとレッスン数を増やしてほしい」「難しかった」（TOEFLレッスン）などのコメントもある。

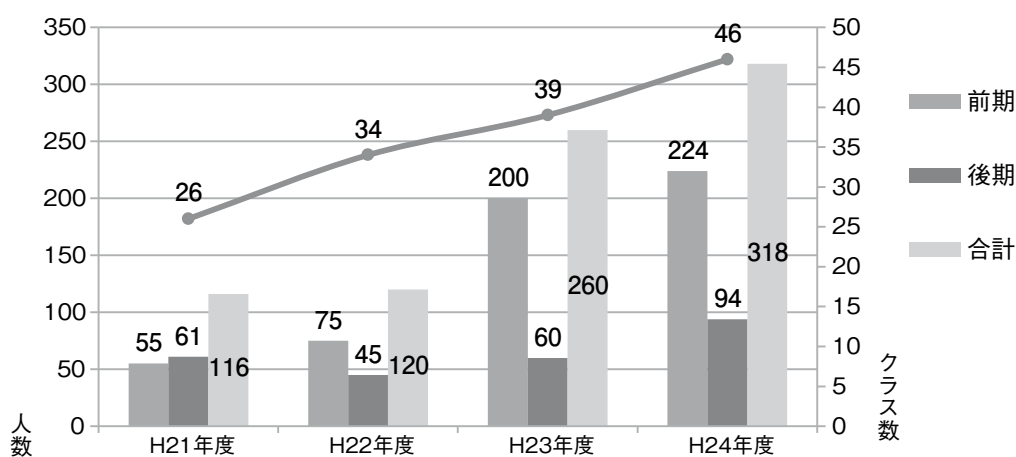


図4 レッスン参加学生数とレッスン数の変化

そして、レッスン受講者の学年内訳、学年内訳は4年間で大きな差異はなく、これまでの受講生を合計した内訳は以下の通りである。（図5、6）

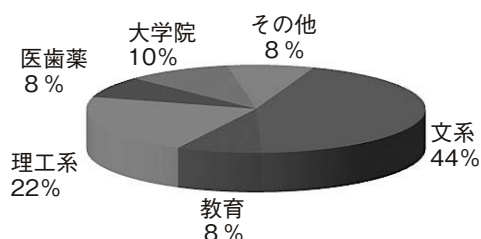


図5 学部別内訳

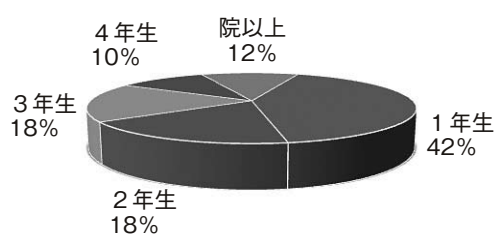


図6 学年別内訳

4-3 ECイベントについて

ECの活動の中でも留学生と日本人学生が自然にコミュニケーションをとるきっかけとして、大きな役割をしているのが交流イベントである。EC内で行うものから、岡山県外に出ていくフィールド・トリップもある。日本や海外の文化などを学ぶアカデミックな内容があれば、アイスクリーム・ソーシャルやたこ焼きパーティなど懇談会的な性格のもの、運動会やドッチボール大会などアクティブな内容のものと同様である。ECのイベントとして、もっとも重要な点は、第一に学生主導であること、第二にECを利用する学生であれば、言語や年齢を超えて誰でも参加できるイベントであることである。

イベントをきっかけにしてECに来るようになった学生、そこで初めて英語コミュニケーションの大切さを痛感する学生も少なくない。学生達がECの活動のどんな時に英語学習意欲を持つかははっきりとした傾向はないが、逆にいうと日常的に学生同士の交流、ソーシャル・アクティビティ、を重ねていくことによって、英語学習や留学、グローバルキャリアに対する興味や意欲を持つようになる学生もいると考えられる。実際に、ECに来はじめたころは留学にあこがれていた程度でも、ECで留学経験のある先輩学生や留学生と話しているうちにあこがれが具体的な目標となり、留学を実現させた、という声もよく聞く。大学内でECのように国籍、年齢、学部、英語力など多様な学生が集まっているところは珍しいが、通常の大学生活の枠組みから少し離れたイベントを開催することで、多様なバックグラウンドをもつ学生達に共通の経験をさせ、それが言葉を越えた信頼関係の構築やお互いに学びあうラーニング・コミュニティの形成に寄与している。また、学生主体のイベントにすることによって、学生達の異文化理解を深めたりやリーダーシップスキルの向上にもつながる。このような効果を期待して、今後もイベントを積極的に企画・運営していきたい。

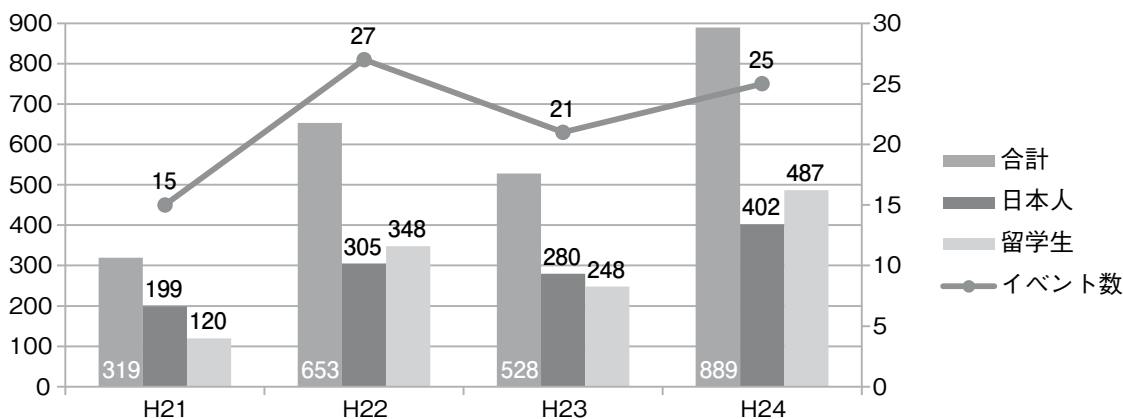


図7 イベント参加者人数とイベントの数

4-4 EC利用学生のテスト結果から見る英語力とその上達

ECの英会話やTOEFLのレッスンを申し込む際には、クラス分けの目安やマテリアルを選ぶ際の参考として、TOEICスコアの記入を求めているが、4年間の推移は表8の通りである。平成21年度の新入生のTOEIC平均が457.7点（Neff・Leonard, 2009）であることを考慮すると、ECを利用する学生は平均すると岡大全体と比較して点数が高く英語に興味があると推測されるが、ECのレッスンに申し込む学生のうち、過半数以上が2年生以上であること（図6）、最高点と最低点の間には大きな開きがあることから、幅広い英語力の学生に利用されていることがわかる。

表8 レッスン申込み者のTOEICスコア

	人数	平均点	最高点	最低点
平成21	55	554.0	850	285
平成22	85	567.1	880	300
平成23	120	532.4	870	295
平成24	138	520.5	914	300
4年間まとめ	398	538.7	914	285

さらに、レッスンを受講した学生が新たにTOEICやTOEFLなどを受験した場合は、任意でスコアの提出を求めているが、EC開設以来平成24年度末までに集まったデータをまとめたものは、表9のとおりである。テストの受験や時期は学生の意思に任せているが、学生達の学習習慣や態度を見ている限り、数か月から半年でテストに向けて集中して対策しているケースが多く、テストを受ける頻度は数か月から1年おき、というのが主である。なお、両テストのスコア変化の結果をみると、テストを受験する学生の多くがかなり真剣に取り組んで好成績を残していることがわかる。しかし、点数が伸びた学生の方がECに結果を報告にくる傾向にもあるので、実際より高めになっていることも予想される。また、スコアの伸びの原因はECだけに由来しているとは限らず、教養の英語授業や自習やその他、他の要因も重なった結果と考えるのが妥当である。

ECでは、英語コミュニケーションを第一の目的としているが、学生の発案・作成によるTOEIC・TOEFLスコアボードを目立つところに展示するなどして、学生が各々自主的にテストに取り組むよう促している。特に、交換留学を希望している学生にとっては、TOEFLスコア取得が条件の一つとなっているため、STや留学を経験した先輩学生を中心に、学生同士が自分のスコアについて自然に話せる環境づくりを目指している。それによって、テストスコアは常に更新できること、英語力はスコアだけで測れるものでないこと、延いては、英語はやれば誰でもできるようになるスキルの一つであること、という当たり前だが見過ごしがちな英語スコアについての常識を学生が理解し、学習意欲につなげることを目指している。

表9 レッスン受講学生のテストスコアの変化

	人数	平均点	最高点	最低点	平均スコア—U p (点)
TOEIC (990点満点)	61名	666.8	950	430	115.2
TOEFL (120点満点)	71名	67.1	91	28	14.2

5. 学生アンケート調査

学生へのアンケートは毎年1回、8月初めにECを利用している全学生を対象に行っているが、

主な質問について4回分の回答をまとめたものが表10と図11である。

学生達に「ECはどのような所か」と尋ねると、まずあがるのが「英語を学ぶ」「英語を話す」である。しかし、更に「ECの良いと思う所はどこか」「なぜ、ECを利用するか」と細かく質問していくと、「Friends」というキーワードが見えてくる。(Murray・Fujishima, 2013)「留学生と友達になれた」「みんなフレンドリーで面白い」「一緒に勉強する仲間が見つかってよかった」などECの中で新しくコミュニティが形成され、日常的に交流することにより、ECが意見や情報を交換したりお互いの学びを支え合うソーシャル・ラーニングのスペースになっていると考えられる。また、学生アンケートでも、ほぼ全員の学生が「新しい友達ができた」、89%の学生が「英語(語学)学習時間が増えた」、過半数の学生が「英語(あるいは日本語)が上達したと実感している」、と回答している。ECでは、積極的に英語で話しかけたり、複数のレッスンを受講するなど熱心に英語を学びに来ている、と一見してわかる学生もいれば、表面的には、ただおしゃべりをしたり、くつろいだりして、なんとなく楽しんでいるだけのように見受けられる学生もいて、多くの学生はその中間に位置する。専攻や学年、国籍、英語力だけでなく学習態度や意欲の違う学生がそれぞれ自分に合った方法でECを利用し、各々のペースで主体的に英語力を向上させることが理想である。

表10 学生アンケート平成21年～24年度まとめ

人数		362名	新しい友達ができたか	Yes	95.5%
ECを利用して、英語が上達したと思うか	Yes	60.1%	ECに来て英語(語学)の勉強時間は増えたか	Yes	89%
	No	9.8%		No	11.1%
	Maybe	30.1%	ECの全体的な満足度(5点満点)		4.36

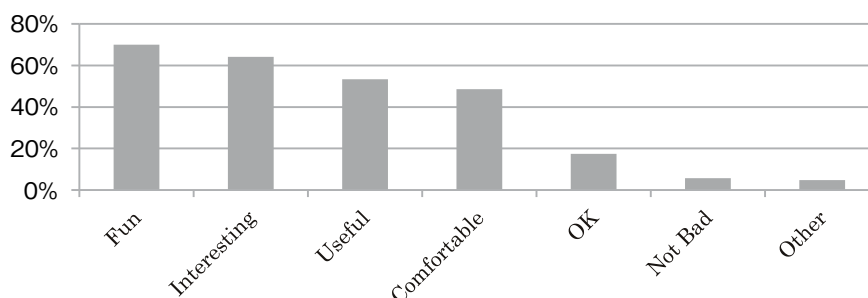


図11 “How do you think about the EC overall?”への回答

ECの印象について、ECの成長と共にアンケートの回答の変化はあまり見られないが、多くのポジティブな意見に交じって、毎年、必ず上がるのが、「最初、入りづらかった」「留学生に話しかけづらい」という声である。ECオープン時には、学生が少しでも入りやすいように、ECの周りの大部分は窓になっていて、外から中の様子がよくわかる構造になっていた。しかし、留学生が何人か座っている姿を見るだけで、なじみのない学生にとってECは特殊な空間に見えるようだ。「ECと外のスペースには見えない国境がある」と表現した学生もいた。この学生は、並々ならぬ決意をしてECに足を踏み入れたのを機に、間もなくECの雰囲気にもなれ、数か月後にはイベントを開催するほどに成長したが、通常は決意をするのに時間がかかったり、そのまま入れずじまいに終わったりすることもあることが残念である。一度、入ってしまえば、或いは留学生と話すきっかけができれば、自分なりのポジションや対処法を見つけて、見知らぬ人に話かけたり、

一緒に何かをすることに慣れていくようだが、最初の一步を踏み出すにはそれなりの覚悟や外的要因が必要になると考えられる。そこで、学生スタッフには、特に入口付近には常に気を配り、躊躇している学生をEC内に案内するように指導している。また、ECに入るきっかけとして一番多いのが「友達や先生に勧められて」なので、周りに興味がある学生がいたら、レッスンやイベントをきっかけにECへ誘うよう、すでにECに通っている学生達からも声をかけるよう努力してきた。

6. EC発展とそれぞれのターニングポイント

ECの4年間を振り返ると、毎年の新しい重要な要素が加わってきたことがわかる。それはともすると4年間全体がECの形成期であったからだともいえるが、その変化は年々利用学生数が増えてきたことと深いつながりがあるといえる。学生のニーズに合わせて、ECに新たな機能を加えることで、さらに多くの学生がECを利用するようになり、急成長を遂げてきたといえるのである。この章では、各時期とそれを特徴づける要因とその背景について述べていきたい。

6-1 第一オープニング期（平成21年5月～平成22年3月）

ECが開設された一年目は、身近な前例もなく、「兎に角、試してみる」の一年であったが、幸い、センターや学部の教員から勧められてきた日本人学生や交換留学生を中心に学生がECに集まるようになり、コミュニティーが形成された。さらに、イベントを通して学生同士の関係が深まり、それが最初のソーシャル・ラーニングの土台を築いたといえる。教員にとっては、一年終了した時点では、レッスンをこなすことと日常の学生対応に終始した、という印象が強かったが、同時にECが発展していく予兆が見えはじめていたため、早くもリソースの確保が課題として挙げられていた。また、試行錯誤の部分も多かったが、通年の活動実績ができたことで、翌年以降の活動を積極的に展開するベースになったといえる。

6-2 第二期：学生スタッフの誕生と言語指定の撤廃（平成22年4月～23年8月）

2年目前期に入ると一日あたりの利用者も前年の31名から60名に増え、レッスンの申込み数も55名から85名と大幅に増加した。これに伴い、教員一人体制では日々の運営やレッスン開講に支障がでることが予想されたため、新たに学生スタッフの採用が始まった。前期は、交換留学から戻ってきた優秀な4年生と留学生を数名、アシスタント・マネージャーとして採用し、教員が目の届かない所をフォローしたり、「各自の経験を活かしてTOEFLのレッスンを担当する」というように、教えるというよりは、一緒に勉強を進めていく、いわゆるチューターとして役割を担う、という意図で始まった。

しかし、5月過ぎると昨年前期にECを利用していた先輩学生が10か月の留学から帰ってきて新たに加わったため、活気が増すと共に、開設して初めて2学期めを迎える留学生ができて（注6）日本人学生との交流も深まり、学生達からイベントのリクエストが上がるようになった。また、ワールドカップ開催の年でもあったため、新一年生も加わり、ECの大スクリーンTVを活用してスポーツ観戦し、国によってサッカーの呼び名が違ったり、サッカーにかける熱意が違うなど、日本人学生にとっては、日本人だけで観戦している時とは違った経験をすることができ、価値感の違いや物事の多面性を身近に学ぶ機会となった。

この時期にECに起こったもう一つの大きな変化は、English onlyのルールを緩めたことである。それまでは、「日本語絶対禁止」とまではいなくても、レッスンはもちろんのこと、フリータイムにも英語での会話の必要性を強調していた。しかし、この前年に、英語を話すことに消極的でしばしばECで専門科目の実験レポートを作成していた学生が、他の学生に影響を受けてTOEIC

を受験したところ485点から650点にスコアを伸ばした、という出来事があり、「英語使用を強要しなくても、ECという環境下にいれば、自然と周囲に影響されて英語学習意欲を持ち、学生達は自主的に英語を学ぼうとするようになる」ということを証明する初めてのケースとなった。その後、彼女は留学生のチューターを務め、カナダに語学留学して、さらに英語力を伸ばして大学院に進学した。そして、彼女が自分の体験談を他の学生に伝えてくれたことにより、更に、英語が苦手な学生達の学習意欲を向上させるきっかけとなったが、彼女の体験談が他学生の心に響いたのは、日本語で説明したからでもある。

それと同時に、留学生の間でも「日本語で話したい」という要望が高くなり、ソーシャル・ラーニングの観点からも学生が言語を選べるようにEnglish onlyのルールを改訂した。それは現在まで続いているが、「頑張って英語で話したい」「強制されないとなかなか英語で話せない」という学生のために、学生スタッフは英語で対応したり、English Tableという英語オンリーのコーナーを設けている。EC内での言語は学生の自由に任せるようになって初めて、同じ学生でも日や気分によって使用したい言語が変わること、言語の枠組みを外しても留学生がいるために英語をなるべく使おうとする学生が多いこと、「ラーニング・コミュニティの形成と維持にはコミュニケーションが重要となる」(Chickering・Gamson,1987)と言われるように、日本語使用を許可するとキャリアや留学などより深い意見交換ができ、信頼関係が築きやすいこと、などが明らかになった。

この時期に加えられた3つ目の特徴は、レッスンのST制の導入があげられる。同年10月からは、全レッスンの担当をSTに任せた。4月から試験的に始まったSTによるレッスンが予想以上に学生から高い満足を得られたこととSTが同じ大学生（多くの場合は後輩）を教える事に対して、普段とは打って変わって真剣で熱心な態度を見せたことが大きな要因である。ST制度については、教員の指導の下、学生同士が教え、教わるという新しいユニークな試みなので、今後更に検証を続けていきたい。3年前から始まったSTやアシスタント・マネージャー採用であるが、現在では、彼らなしのECは想像できないほど、重要な役割を果たしている。

そして、翌年、平成23年4月からは、STによるTOEFLレッスンの受講希望者が大幅に増加した。大学で提供されているTOEFLの授業は年間2科目程度だったこともあり、留学をめざす学生が大幅に増えたこの年からレッスンの需要も高まった。それに加えて、アシスタント・マネージャーやSTに留学や英語学習について相談する学生数も目立って増えている。その背景には、留学から帰ってきた先輩学生にECで会って、詳しいアドバイスが聞けるようになったことと、先輩学生も留学や海外経験に興味のある学生を親身になって応援するようになったことが挙げられる。

ECがオープンした平成21年から平成23年の間に、留学を希望する学生はそれ以前と比べて大きな伸びを見ているが、同様に、ECのレッスンに参加する学生数も伸びていることは関係が深いと推測される。

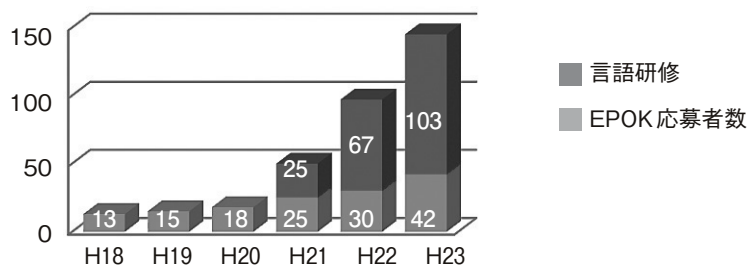


図12 海外へ留学している学生数の推移（国際センター協力のもと算出）

6-3 第三期：2倍に拡張、学生がつくるEC（平成23年9月～平成25年2月）

ECが開設して2年半経過した平成23年9月にスペースが約2倍に広がった。それまでのレッスン数やレッスン参加学生の増加に伴い、レッスン環境の改善が課題（注7）となっていた矢先に拡張が急ぎょ決定したことは幸運なことであったが、それに伴い、新しいスペースの活用方法、全体のレイアウト、追加する什器、などテーブルやイスから絨毯に至るまで、短期間に決定し、新学期と共に新たな学生を迎えられる体制を整えなければいけないという課題が持ち上がった。

そこで、学生スタッフを中心に学生達から新しいスペースの活用法、什器の希望など広く集め、一つずつ根気よく決定していった。また、什器が届いてからは、学生の納得のいくようにレイアウトを何度も調整し、留学生・日本人学生が協力しあって、新ECを作りあげたといっても過言ではない。これにより、それまで一部の学生達の中に、芽生え始めていた「自分たちがECのオーナーである」という気持ちが強くなった。

物理的に広くなり、中央に両開きのドアが付いたことで、新たな学生がECを訪れるようになったが、拡張の過程にかかわった学生達は、より多くの学生に自分たちがデザインしたECの良さを分かってもらいたい、利用してもらいたい、とその後の活動全般に対して積極的に協力してくれるようになった。

ECのように教員も常駐しながら、学生主体で運営できるという施設はまれな例かもしれない。しかし、学生の主体性を尊重することで、学生のニーズをくみ取ることができ、それがまた新しい学生がECに来る原因になったと考えられる。第二期では、STや学生スタッフが中心となってECの活動を発展させてきたが、開設から2年半を経た第三期では、牽引する学生の幅が一部のスタッフ学生からカフェをよく利用する学生全体に広がり、利用学生が其々ECを支えているという構図ができてきたといえる。

7. まとめ

本稿では、活動データと学生アンケートを基に、平成21年5月から平成24年3月までのイングリッシュ・カフェの活動の軌跡を追い、その4年間を分析した。

利用者数、レッスン受講者数、イベント参加者数はそれぞれ増加し、年を経るごとにECの活動が学生に支持されてきたと言える。レッスンを申込んだ学生のTOEICスコアについては、一貫した変化は認められなかったものの、レッスン受講学生のTOEICやTOEFLのスコアの伸びは、どちらも好成績だった。この成果とECが直接的に結びついているかどうかは不明だが、英語コミュニケーションを目的とするECを利用する学生のスコアの上昇は、すなわち、ECが何らかの形で彼らの英語力向上に貢献したといえるので、喜ばしいことである。

学生アンケートの結果からは、学生にとってのECのキーワードが「友達」となっていることが分かった。それは、ECの活動自体が「友達との交流や学び合い」すなわちソーシャル・ラーニングであることを示しているといえる。その一方で、学生からはそのソーシャル・ラーニングの輪の中に入っていく難しさも指摘されている。

最後に、ECの全活動の大きな流れを、開始したばかりの初期、English onlyのルール緩和や学生スタッフ採用が始まった第二期、学生が積極的にカフェ運営に参加するようになった第三期に分類し、それぞれについての特徴や背景とECの発展について分析した。その結果、短い間に目覚ましく成長したECの背景には、まず、開始当初からECはソーシャル・ラーニング・スペースとしての役割を果たしていたことが挙げられる。また、STやアシスタント・マネージャーなどの学生スタッフの活躍やその後の一人ひとりの学生のECへの積極的、自主的な参画が、ECの発

展の大きな要因であったと考えられる。

平成25年5月からECはL-caféへと物理的にも機能的にも大きく発展したが、これまでの4年間の経験を振り返ることで、ソーシャル・ラーニング・スペースとしての機能を充実させ、今後もより多くの学生の英語力向上と自発的な学習態度の啓発、異文化理解や国際交流への関心の向上に貢献していきたい。

- 注1) ソーシャル・ラーニング・スペースとは、ソーシャル・アクティビティを通して学生同士がお互いに学びあうスペースを指す (Murray & Fujishima 2012)
- 注2) 現在のキャリア開発センター
- 注3) 医・歯学部は病院の併設された鹿田キャンパスにあり、ECのある津島キャンパスからは約4キロほど離れている。
- 注4) ECは原則、月曜日から金曜日の週5日オープンしている。平均31人×5日=175人
- 注5) 平成21年度は1日平均40.5人の利用であったので、40.5×5日×20週=4,500人、同様に平成24年度は、75人×5日×20週=7500人
- 注6) 交換留学生はほとんどすべて夏に帰国するため、夏に入れ替わる。日本人学生とは違い、後期が岡山大学での初めての学期、翌年前期が2学期めとなる。10月に来日した学生は、前期がスタートすると留学生生活の後半分しか残っていないことに気づいて焦るケース場合もあるが、そのころまでには岡大の大学生活にもなれ、季節も明るくなってくることから、ポジティブな態度になる学生も多い。
- 注7) スペース不足からEC内では収まらず、外側のカフェテリアの部分でレッスンを行っていたが、レッスン数や人数が増えるにしたがって、スペースの確保が難しくなると共に、もともと飲食スペースとしてデザインされていたところなので、授業用には適していない面もあった。中でも、音が必要以上に反響してしまうため、大人数だと説明が聞き取りにくかったり、通気性が悪かったりした。

参考文献

- Chickering, A. & Gamson, Z. (1987) . Seven principles for good practice in undergraduate education, *AAHE Bulletin*, 39 (1) , 3-7.
- Lomas, C. & Oblinger, D. (2006) . Student practices and their impact on learning space. In D. Oblinger (Ed.) , *Learning Spaces* (pp. 5.1-5.11) . Washington, DC: EDUCAUSE.
- Murray, G. & Fujishima, N. (2013) . Social language learning spaces: Affordances in a community of learners. *Chinese Journal of Applied Linguistics*, 36 (1) , 147-150.
- Neff, P. & Leonard, J. (2009) Using the TOEIC-IP Test for university placement purposes: Analyses and ramifications. 『大学教育研究紀要』 第5号 pp95.
- 宇塚万里子 (2009) 「イングリッシュ・カフェ平成21年度活動報告及び平成22年度への課題」『岡山大学外国語教育センター 平成21年度年報』 pp15-20

宇塚万里子 (2010) 「平成22年度イングリッシュ・カフェ活動報告」『岡山大学外国語教育センター
平成22年度年報』 pp25-32

宇塚万里子 (2011) 「平成23年度イングリッシュ・カフェ活動報告」『岡山大学外国語教育センター
平成23年度年報』 pp23-30

宇塚万里子 (2012) 「イングリッシュ・カフェ平成24年度活動報告」『岡山大学外国語教育センター
平成24年度年報』 pp90-97